

雑 録

再び植物區系の境界吐噶喇水道に就て

小 泉 源 一

予は昭和三年九月鹿兒島縣出版の行幸記念奄美大島に於ける博物調査報告書第二編に於て、吐噶喇水道が琉球臺灣の植物區系と固有日本の植物區系の境界にすべき事を提議し、且つ此境界線は更新世より以前に既に存在せしものと考ふ旨を發表せり。

此に於て吾人の最も聽かんと欲するものは屋久島種子島より與那國島に到る廣義の琉球群島の地史である、半澤理學士に據れば琉球群島地史は二疊紀を以て始り、現世植物區系に最關係深き新第三紀なる瑞穂紀の初に前時代高千穂期の陸化時代に次で島尻海浸時代があり、次で後島尻陸化時代が來り、瑞穂期と敷島期との更代頃に琉球海浸あり、而更新世の敷島時代となれば後琉球期陸化時代となり、次で國頭海浸時代となり其終りに更に後國頭陸化期となり、現世の初には又海浸ありて沿岸に裾礁を作りしが其後現今まで漸次土地隆起して隆起珊瑚礁を見るに到れり。

扱て新第三紀以來度々の海浸と陸化とをくりかへしたるが、いつの陸化時代にも吐噶喇水道が陸橋と化せし事はなかりし事明なり、何となれば今飯匙倩類は新第三紀以來出現せしものなるが、現今も臺灣、南支那、比律賓、東印度、印度、大洋州に分布し元來暖地方に出現せしものなるを想はしむるが、然も飯匙倩が新第三紀は勿論、第四紀にも屋久島種子島に分布し得ざる氣候には非らざりしなり。然も飯匙倩の自然分布は寶島小寶島以南にして屋久島種子島には分布せず、即ち此事實は吐噶喇水道が新第三紀以來琉球群島がいつの陸化時代にも廣大なる水道として存在し、本水道により支那東海は大なる内海を成したるものと考へらると。

是を以て寶島小寶島以北の吐噶喇水道は琉球臺灣の植物區系と固有日本の植物區系の境界として最も適當なるものとすべし。

Adrien FRANCHET 氏を偲ぶ

北 村 四 郎

東亞植物分類學上の大立物の一人、アドリアン、フランセー氏は今年を去る正に百年前、1834年4月21日佛蘭西、ロアール、エ、セール縣 (Loir-et-Cher). ペズー (Pezou)